

ウミガメを題材とした環境教育の実態と課題

室田 貴子

キーワード：ウミガメ保護活動、環境教育、聞き取り調査

1. 研究の背景と目的

古くから人間とウミガメの関わりは深く、食用や装飾品として利用されてきた。一方で、ヒラタウミガメを除く現存する全てのウミガメ類は国際自然保護連合のレッドデータブックにおいて絶滅危惧種として指定され、絶滅が危ぶまれている。日本においても、1950年頃から市民によるウミガメの観察や上陸産卵モニタリングが行われ、また、いくつかの地方自治体がウミガメ保護条例を制定するなどして、ウミガメの保護活動が行われてきた。さらに、各地で学校を拠点としたウミガメ調査と保護活動が活発に行われており、中でも、徳島県の日和佐中学校の生徒によって行われた取組みは、世界で初めてのウミガメの上陸産卵モニタリングと言われ、海外の研究者からも高い評価をうけている。また、ウミガメ保護の取組みは、子ども達へのウミガメを題材とした環境教育としても展開されていった。しかし、学校を拠点とするウミガメ保護活動や、それらを通じた環境教育の実態については、各学校での取組みに関する資料が個別に残されてはいるものの、それが体系的にまとめられ、述べられることはなかった。

本研究では、ウミガメ調査と保護活動を語る上で欠かすことのできない学校での取組みに関する聞き取り調査を行い、ウミガメ保護活動を土台とした子ども達への環境教育を実践することで、地域やウミガメ調査活動へ与える影響、およびその実態や課題を明らかにし、今後の環境教育の在り方、ウミガメ調査と保護活動について提言を行う。

2. 研究の方法

日本でウミガメの環境教育を実践した学校のうち、以下に挙げる5校の取組みに関して聞き取り調査を行った。対象校は、沖縄県嘉陽小学校、鹿児島県通山小学校、徳島県日和佐中学校、徳島県蒲生田小学校、静岡県御前崎小学校である（現在、沖縄県嘉陽小学校は閉校、徳島県蒲生田小学校は休校している）。主な質問内容は、①地域におけるウミガメの文化、②ウミガメに関する活動の歴史、③ウミガメ保護活動の内容、④ウミガメ保護活動の各方面への波及効果、の4点である。

3. 聞き取り調査の結果

5つの事例調査を通じて、ウミガメの上陸産卵モニタリング、子ガメの飼育、卵のふ化と脱出の観察、放流、海岸清掃など、共通した活動が実施されていたことがわかった。学校を拠点とする活動は、各地でのウミガメ上陸産卵に関する貴重なデータを残し、ウミガメの生態解明へ寄与してきた。また、それらの調査結果は、行政がウミガメ保護条例を制定するきっかけにもなっていた。さらに、休校や閉校などの理由で終了せざるを得なかった嘉陽小学校、日和佐中学校、蒲生田小学校の取組みは行政や地域住民が活動を引き継ぐこととなり、学校での活動が環境教育だけでなく副次的な影響力を持っていたことがわかった。環境教育の効果としては、教育者やウミガメに関する活動に関わった子ども達が、自然への畏敬の念、郷土愛を培った、と当時を振り返っており、子どもの体験学習を中心として展開されたウミガメ保護活動は、ウミガメの生態調査に貢献しただけでなく、子ども達の情操教育にも良い影響を与えていたことが伺えた。また、こうしたウミガメ保護活動やウミガメ保護活動を土台とした環境教育は、学校だけではなく、地域をベースとする行政、専門家集団、地域住民の協力によって支えられてきたことが明らかになった。

4. 結論

今後も、ウミガメ保護活動を通じた環境教育が社会的な役割を果たしていくためには、地域にある学校、行政、地域住民、民間団体や専門家が協力し、より質の高い保護活動や環境教育を実践的に行っていく事がきわめて重要となるであろう。小中学校でのウミガメを題材とした環境教育は、生涯教育の基礎となる義務教育時期にあたり、ウミガメ保護の側面からみた意義だけでなく、自然環境と人間の在り方や、自らで郷土の環境を捉え行動する力を養うことができ、環境保全を行える人材を養成するための環境教育として有意義な活動の一つであると考えられる。